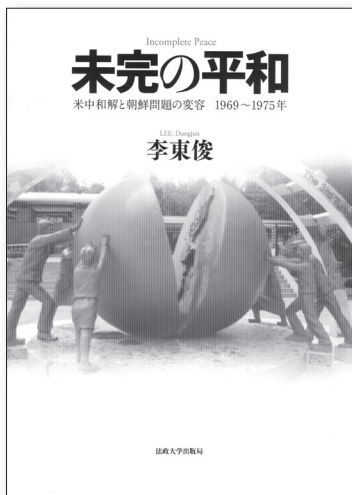


選評

関西大学法学部教授

大津留(北川)智恵子

米中・南北関係の表裏から、 分断を読み解く



- 李東俊「未完の平和——米中和解と朝鮮問題の変容 1969～1975年」
- 法政大学出版局
- 2010年12月発行
- A5判、528ページ
- 定価 6,300円(税込)

本書は、「韓国日報」の記者から研究者への道を進んだ著者の博士論文を土台としており、詳細な外交文書の分析による大部な著作である。それにもかかわらず、デタント期の東

アジア政治が、米中関係、南北関係、そして米中による「裏」での調整・連携という三つのドラマが絡み合うダイナミックな展開として描かれていたために、一気に読ませてしまう。

朝鮮半島の分断構造は、米中戦略関係に規定されながら大きく変動した、というのが著者の主張である。従って、南北朝鮮という局地的現象ではなく、東北アジアの国際政治として総合的な分析が必要であると説く著者は、正統性と安全保障をキーワードに用いて、その分析を進める。

正統性とは、朝鮮戦争を通して設立された米韓の「国連帽子」、すなわち国際的に認められた正義であり、裏返せば中朝の「敵性団体」という位置付けである。国連を軸とする正統性は、大韓民国(以下、韓国)の政治的アイデンティティを成す。米中接近は根本的に正統性をめぐる構図を塗り替えることになる。

他方の安全保障は、在韓米軍と中朝同盟の関係であり、そこには日本

の軍事的な存在も関係してくる。朝鮮半島の当事者であり、その主体性を主張しながらも、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）と韓国は、ジュニアパートナー同士でもあった。つまり、両国とも米中間での利害調整を反映させる形でしか、自らの路線を決定できなかったのである。

それを最も強烈に示すのが、在韓米軍の性格の変化であろう。ニクソン・ドクトリンを受けて、その削減が米韓同盟をきしませた在韓米軍は、日中和解によって対中朝抑止力から朝鮮半島の安定を確保する兵力と意味を変え、温存された。「韓国政府は自由中国（台湾）のように犠牲になることを懸念し」、そのために「米国のコミットメントだけに依存するのが正しくない」と考えた朴正熙は、同

床異夢でありながら金日成との緊張緩和に進んだ。「ニクソン・シヨック」と「周恩来・シヨック」へのヘッジとして始まった南北対話は、同時に、そのために足元を固めるという理由で朝鮮半島に「維新体制」と「唯一体制」という双子の権威主義体制を生む皮肉な展開となった。

しかし、朝鮮半島から見ると、より皮肉な展開とは米中側にある。両国は双方の戦略的な関係を最も重要視し、そのためには朝鮮半島の分断が解消されることよりも、二つのコリアのままでも朝鮮半島が安定していることを優先したのである。

今日の朝鮮問題の帰趨きすうに最も決定的な影響を与えると著者が指摘するのが、北朝鮮の対米直接交渉への転換である。アメリカとの交渉で戦略

的地位を得た中国や要望を通した北ベトナムに倣い、金日成は自主の立場を放棄しても対米直接交渉を求め続けた。そのために利用されたのが、軍事挑発などの強硬策であった。

米中が協力して「静かに」国連軍司令部の解体を試みたにもかかわらず、北朝鮮は中国以外の国々の協力の下に、対決的な決議を並行して採択させてしまう。こうして国際的地位が向上した北朝鮮と、この時期に経済的優位を確保した韓国は、「消極的平和」を継続することになる。

結局は解体を免れたものの、もし国連司令部の在韓米軍が国連帽子を失うと、半島有事に日本の基地を事前協議なしに使えなくなるという危機に直面し、岸秘密議事録への言及もなされた、という最近の成果も盛

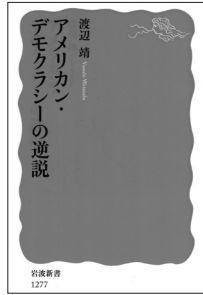
り込まれている。

グローバルな冷戦の終結にもかかわらず、東アジアが不安定化している現状の背景には、こうしたデタント期の政治が関わっている。朝鮮半島の分断を前提にキッシンジャーが同心円状に描いた4者会谈や6者会谈は、今日の朝鮮半島をめぐる多国間の構図の原型となっている。

歴史の「イフ」を論じるべきではないが、米中が裏の外交以上のイニシアチブを取っていけば、朝鮮半島に出口が見出せたのかと考えさせられる。また独自に北朝鮮に歩み寄りを試みた日本には、地域国家として主体的な動きは取れなかったのだろうか。著者はあえて異なるシナリオを示さず、「忍耐と譲歩の旅」がこれからも続いていくと締めくくる。

表紙に「統一への熱望」を表現した造形物が使われた本書には、著者の朝鮮半島の恒久的な平和への思いが込められている。

丹念なフィールドワークから アメリカの本質に迫る



■渡辺靖『アメリカン・デモクラシーの逆説』■岩波書店
2010年10月発行■新書判、238ページ■定価798円(税込)

2008年の選挙が、初のアフリカ系の大統領を生んだことは、アメリカだけではなく世界に希望をもたらした。しかし、2年後の中間選挙では、オバマ政権への不満により、議会民主党は大きな敗北を喫した。「ティーパーティー」に代表される

アメリカの人々の怒りは、どこから発し、何を求め、アメリカ政治はどこに向かつて行くのだろうか。

本書は、文化人類学者としてアメリカでのフィールドワークを重ねた著者が、アメリカの理念である自由公正、多様性や民主主義が、実際の社会の中で転倒している状況を伝えながら、それでもアメリカの強さである自己矯正力によって、希望が生み出されている姿を描いている。

アメリカ社会に見られる両極化は、保守かりベラルカを超える、より根源的な次元での断絶だと指摘する。また、民主党内の大統領予備選で人種やジェンダーが直接の争点にならなかったのは、それらが「克服」されたからではなく「回避」されたためだと指摘し、いずれも本質を突い

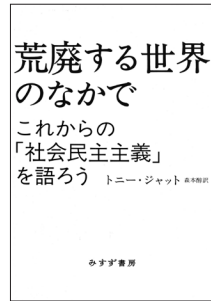
ている。

著者は、アメリカが分裂するならば、それは多様性のためではなく、原理主義的イデオロギーによると論じる。そして、新自由主義がアメリカの多様性をますます困難にしていると指摘する。それでも、アメリカを統合していく力が生じる現場を、著者は観察している。

親米とか反米、拜米とか排米という表面的なレッテルを超えて、アメリカの本質に迫る本である。

『ヨーロッパ戦後史』の著者、最後の提言集

個人が豊かでも不平等な社会は、集合体として貧困化し、社会問題が悪化する、というのが社会民主主義を奉じる著者の見解である。20世紀



■トニー・ジャット(森本静訳)『荒廃する世界のなかで——これからの「社会民主主義」を語ろう』■みすず書房■2010年10月発行■四六判、272ページ■定価2,940円(税込)

に解決したと思われた社会問題が、21世紀に再び深刻化する中で、全体としての人間の価値を議論することが重要だと説く。

社会主義の崩壊は、新自由主義への信奉を促したが、本当はそこから何を学びとるべきだったのだろうか。人間が大切にしてきたものには、必ずしも数量化になじまない財もある。経済一辺倒の議論ではなく、倫理的裏付けのある公共的な対話が必要である。社会民主主義が目指すのは、そうした価値への回帰なのである。アメリカでは、公共善に個人の目

標が置き換わってしまい、お互いと次世代に対する信頼を失ったために、税金ではなく民営化が賞賛されると論じる。もつとも、かつての共同体は国内マイノリティーや非西欧諸国を排除しており、安易に懐古することはできない。

リーマン・ショックはグローバル化が進んでも国家が健在であることを示し、むしろ新自由主義による信頼崩壊が、移民排斥など、閉ざされた領域国家を生み出したと指摘する。昨年夏に病死した著者は、周囲が同じことを信じる時に異議を唱えることの難しさを熟知していた。だからこそ、間違いが分かっていたならば、それに立ち向かって「行動する」必要があると、最期に訴えている。

(おおつる・きたがわちえこ)